

第1章 大田区の歴史的風致形成の背景

1-1. 自然的環境

(1) 位置と区域

大田区は、東京 23 区の最南端に位置し、東は東京湾、西と南は多摩川に面し、江東区、品川区、目黒区、世田谷区及び神奈川県川崎市とそれぞれ隣接している。

東京 23 区の中で最大の面積 64.86 平方キロメートルを有しているが、羽田空港が区の約 4 分 1 の面積を占めている。

要確認 (面積: 2025. 12 データ確認)



図 1-1-1 大田区の位置

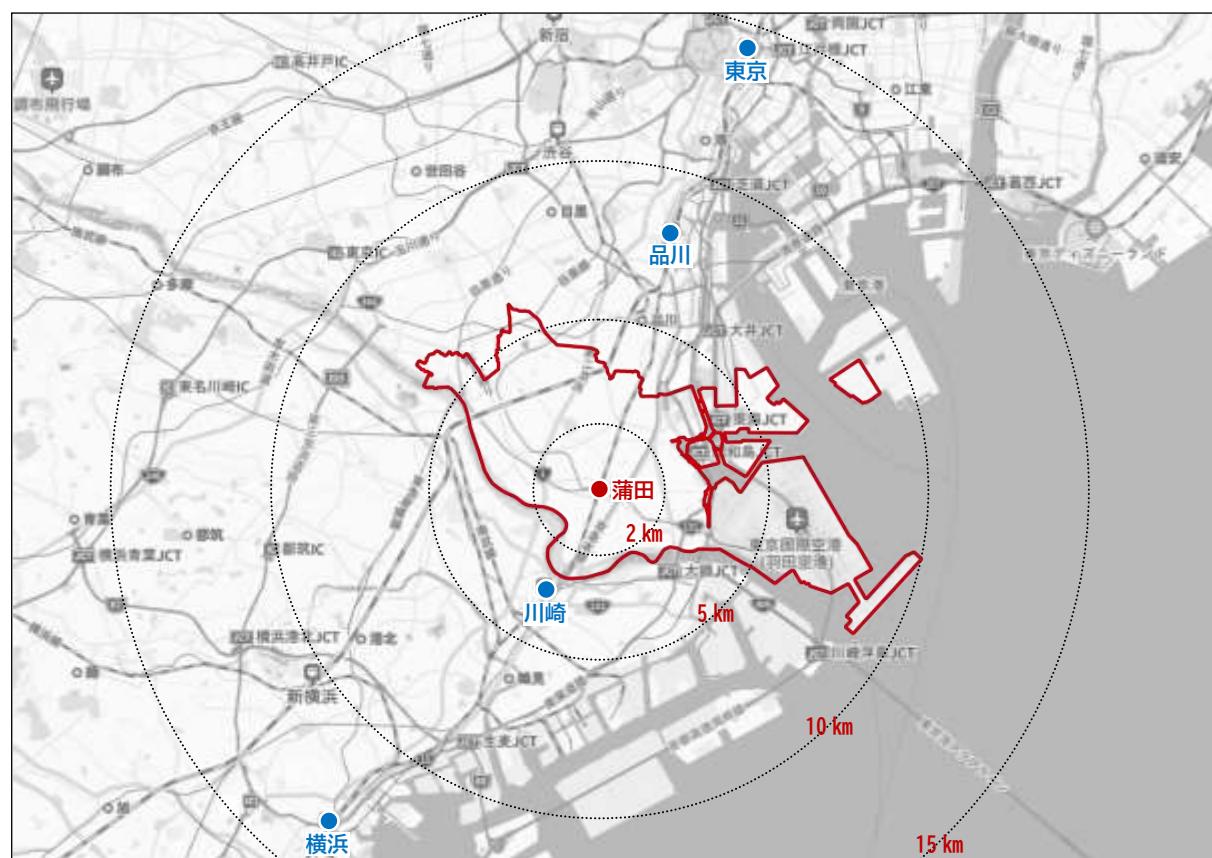


図 1-1-2 大田区の区域

(2)地勢

大田区は、面積 64.86 平方キロメートルに及ぶ、東京 23 区内最大の広さを有している。

区域は、北西部の丘陵地帯と南東部の低地に二分され、丘陵地は武蔵野台地の南東端に当たる。また、低地部は、海岸や多摩川の自然隆起と堆積によりできた沖積地とそれに続く埋立地からなっている。

海拔は、田園調布付近が区内最高地点で 42.5 メートルあり、南東に向かって次第に低くなり、低地部の高い所で 5 メートル程度、また海岸線や埋立地で 1 メートル程度である。

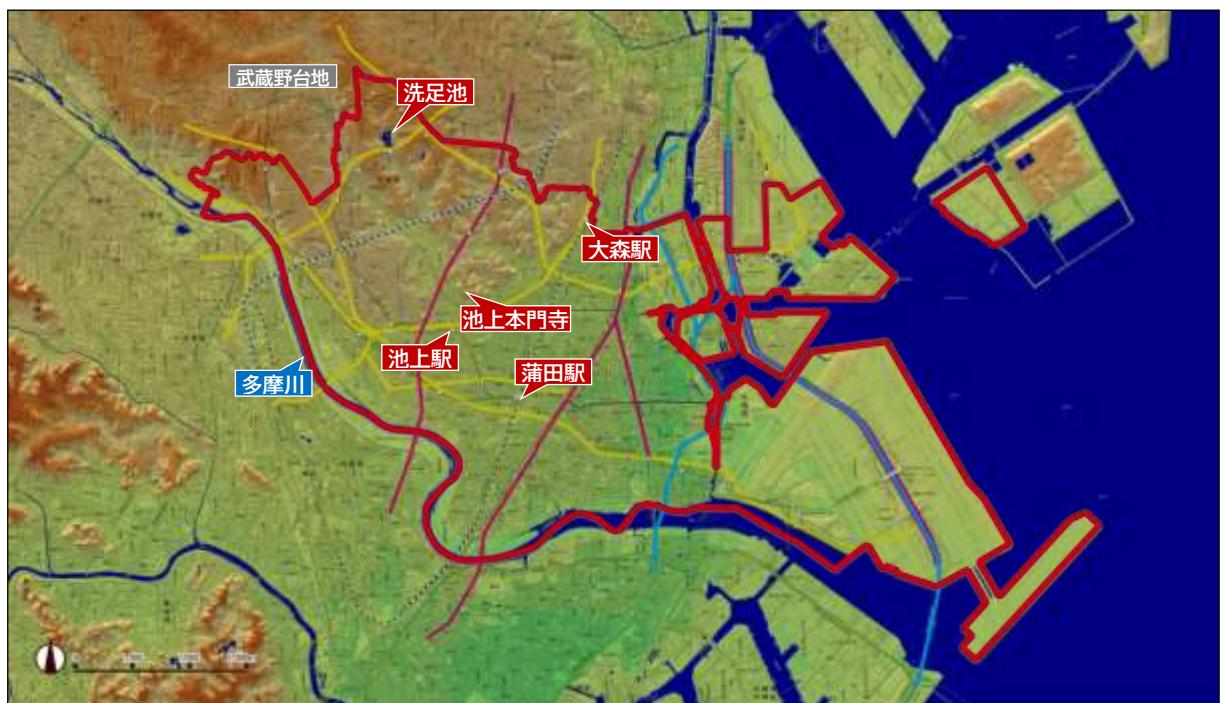


図 1-1-3 大田区の地勢

(3)地質

大田区の地質は、大きく分けて 2 つの地層で構成される。

1 つは武蔵野台地を形成する地層であり、約 2000 万年前から約 1000 万年前にかけて関東ローム層が堆積して形成された台地である。大田区の武蔵野台地は、比較的平坦な地形を形成し、関東ローム層の厚さは平均約 20 メートルである。

もう 1 つは多摩川の堆積物で形成される地層であり、多摩川は約 100 万年前から現在にかけて区南東部を流れ、その堆積物によって三角州や海岸低地が形成されている。三角州は、多摩川の河口部に堆積した砂礫や泥で形成される地形で、羽田空港周辺や東海道新幹線の線路沿いに広がっている。海岸低地は、海岸線に沿って堆積した砂や泥で形成される地形で、海岸部に広がっている。

(4)水系

①河川

区内を流れる河川には、多摩川、海老取川、呑川、内川、丸子川などがある。

多摩川は、山梨県、東京都、神奈川県を流れる多摩川水系の本流の一級河川である。下流域については東京都と神奈川県の都県境としての役割を担い、首都圏の一級河川でありながら、護岸整備されていない部分も多く、川辺に野草や野鳥が多くみることができるものである。

呑川は、呑川水系の本流の二級河川である。東京都世田谷区内に水源を持ち、本区内は石川町、雪ヶ谷、久が原、池上、蒲田及び糀谷を流れて東京湾に注いでいる。下流部は、潮の満ち引きの影響を受ける感潮河川となっている。なお、東蒲田付近で旧呑川と新呑川に分流するが、大水の際の洪水や氾濫を防ぐために直線化した新呑川が本流であり、羽田空港との間の海老取川に注ぎ込んでいる。

海老取川は、羽田六丁目辺りで多摩川から分流し、羽田空港を隔てるように北流する多摩川水系の一級河川である。流れがほとんどないため、岸には羽田漁師の船やプレジャーボートが係留される風景を見ることができる。

②池

区内の代表的な池には、洗足池があげられる。

洗足池は、洗足池公園内にある、流れ込む河川のない湧水池である。昔、主要な水源となる湧水は4箇所あったとされるが、現在は清水窪弁財天の湧水が1つ残るのみとなっている。なお、清水窪弁財天の湧水は「東京の名湧水 57 選(平成 15 年(2003) 1 月)」に選定されている。洗足池公園は、春になると約 200 本の桜が見頃を迎え、池と桜が映える花見の名所として、毎年、大勢の観光客が集まり賑わいを見せる場所となっている。

なお、かつて「千束郷の大池」と呼ばれていた洗足池の名の由来には、地名の「千束」によるもののほか様々な説があるが、その1つに身延山久遠寺から常陸へ湯治に向かう途中の日蓮宗開祖・日蓮が休息した際、池畔で手足を洗ったという説もある。その際に日蓮が袈裟を掛けたとされる「袈裟懸(掛)の松」が、隣接する妙福寺に今も残っている。



図 1-1-4 多摩川河川敷



図 1-1-5 洗足池

(5)みどり

要確認（公園数：2025.12 データ確認）

大田区のみどりは、国分寺崖線沿いや南北崖線沿い、また多摩川、呑川、内川等の河川、さらには運河沿いのみどり等がつながり、都市の骨格の一部を形成している。

平成30年度(2018)時点の区全体の緑被率は18.32%、羽田空港を除くと15.75%である。緑被率は過去35年間ほぼ横ばいであったが、平成30年(2018)で減少に転じた。これは樹木緑被率の減少が大きく、住宅地を中心とした民有地における開発や宅地の細分化が要因となっている。

一方、公園等の整備状況は、令和4年(2022)4月時点で574箇所、総面積約306ヘクタールであり、区民1人当たりの面積は4.19平方メートルである。また、河川敷の緑地等を含めると総面積は約383ヘクタールとなり、区民1人当たりの面積は5.25平方メートルとなる。

また、農地は、面積約2.5ヘクタール、うち約2ヘクタールが生産緑地の指定を受けているものの、市街化の進展により減少傾向にある。

さらに、一定規模以上の木竹の伐採等の行為を許可制とし、緑地を保全する制度として都市緑地法第12条に規定されている特別緑地保全地区は、令和2年(2020)時点では4箇所、面積2.64ヘクタールが指定されている。



図1-1-6 緑被概況と特別緑地保全地区

(6)気候

要更新(2025.1~12にデータ入替)

大田区の過去5年間(令和2年(2020)~令和6年(2024))の月別平均気温と月別平均降水量は、以下のとおりである。

月別平均気温をみると、最高が8月の28.7°C、最低が1月の7.0°Cである。年間平均気温は17.5°Cである。一方、月別平均降水量は6月が最も多く、198.5ミリである。

表1-1-1 年別・月別の平均気温(大田区羽田)

(°C)

	2020年	2021年	2022年	2023年	2024年	5年間の平均
1月	8.2	6.4	5.8	6.7	8.0	7.0
2月	9.1	9.1	6.0	8.0	8.7	8.2
3月	11.4	13.0	11.1	13.2	10.2	11.8
4月	13.4	15.4	15.4	16.7	16.9	15.6
5月	19.6	19.8	19.1	19.3	20.1	19.6
6月	23.3	22.9	22.8	23.4	23.3	23.1
7月	24.7	26.1	27.4	28.4	28.7	27.1
8月	29.1	27.7	27.7	29.4	29.4	28.7
9月	24.9	22.8	24.6	27.2	27.0	25.3
10月	18.2	18.9	18.3	19.8	21.4	19.3
11月	15.0	14.8	15.6	15.6	14.9	15.2
12月	9.0	9.0	8.8	10.5	9.4	9.3

表1-1-2 年別・月別の平均降水量(大田区羽田)

(mm)

	2020年	2021年	2022年	2023年	2024年	5年間の平均
1月	95.5	44.5	17.0	17.5	39.5	42.8
2月	19.0	70.0	56.0	34.5	64.0	48.7
3月	107.5	170.0	98.5	102.5	172.5	130.2
4月	174.0	127.5	187.5	64.0	97.5	130.1
5月	88.5	91.5	113.5	161.5	167.5	124.5
6月	180.5	75.0	60.5	275.0	401.5	198.5
7月	252.5	252.0	207.0	39.5	131.5	176.5
8月	6.0	213.5	124.0	104.5	29.5	95.5
9月	113.0	172.5	247.5	206.5	92.0	166.3
10月	154.5	190.5	105.5	125.0	156.0	146.3
11月	13.0	69.0	73.0	44.0	84.5	56.7
12月	11.0	129.5	52.0	26.0	0.0	43.7

1-2. 社会的環境

(1) 区の合併経緯

明治4年(1871)、大区小区制が始まり、東京府は6大区 97 小区に分けられた。明治6年(1873)には、近隣地域の編入により 11 大区 103 小区となり、この時、第7大区が現在の大田区のおおよその位置に該当し、43 の村があった。

明治11年(1878)、郡区町村編成法(郡区町村制)が制定されて大区小区制は廃止となり、代わって東京府には 15 区 6 郡が配置された。この時、荏原郡が現在の大田区のおおよその位置に該当する。村の数は変わらない。

明治22年(1889)、15 区の区域が新たに東京市となり、明治26年(1893)に三多摩地域(西多摩郡、南多摩郡、北多摩郡)が東京府に移管されて、概ね現在の東京都域が確定した。その後の明治29年(1896)には東多摩郡と南豊島郡が合併して豊多摩郡となる。明治22年(1889)の市町村制により、大森村、入新井村、馬込村、池上村、調布村、矢口村、蒲田村、六郷村、羽田村の8村が現在の大田区のおおよその位置に該当する。

昭和7年(1932)、東京市が周辺5郡 82 町村を新たに 20 区に編成、合併して東京 35 区ができる。この時、馬込、東調布、池上、入新井、大森の5つの町が大森区として、また、矢口、蒲田、六郷、羽田の4つの町が蒲田区としてできている。

その後、昭和22年(1947)3月15日、35 区が 22 区に再編された際(同年(1947)8月に練馬区が板橋区から分離独立して 23 区になる)、当時の大森区と蒲田区が合併して現在の大田区が成立した。

また、近年では、令和2年(2020)に中央防波堤外側埋立地西側が令和島として加わった。



図 1-2-1 明治初期の大田区域



図 1-2-2 明治 22 年(1889)の大田区域

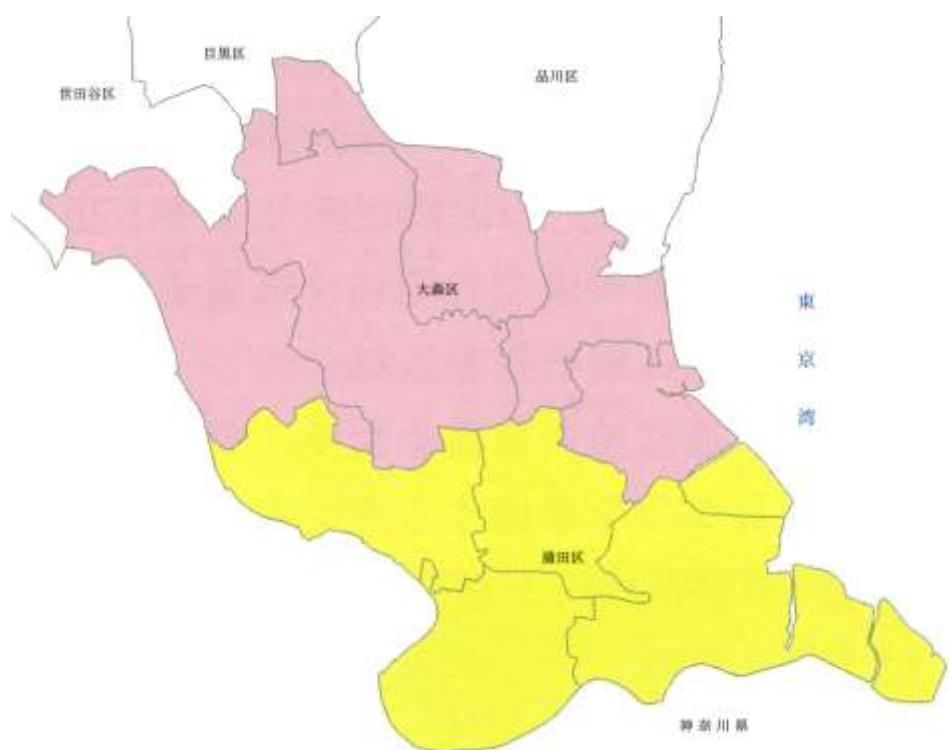


図 1-2-3 昭和 7 年(1932)の大田区域

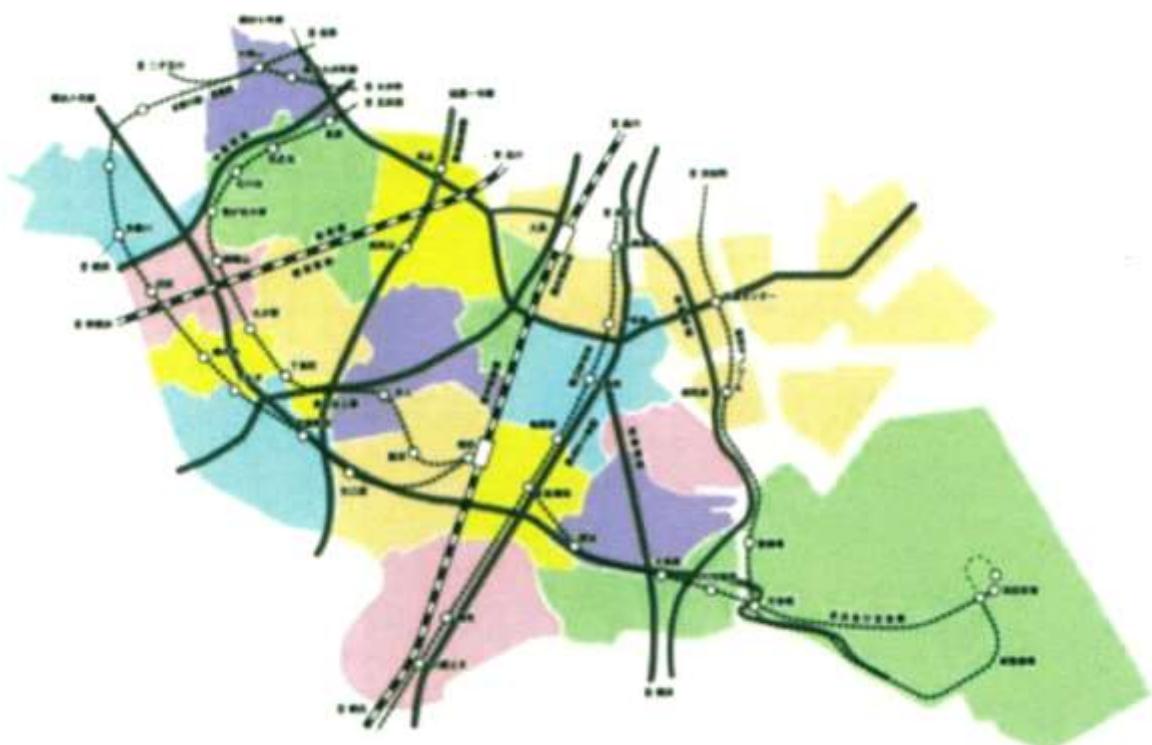


図 1-2-4 昭和 22 年(1947)以降の大田区域

表1-2-1 大田区の合併経緯

大区制 明治4年~11年	郡区町村制 明治11年~22年	市町村制 明治22年~昭和7年	町改正 町制施行	市域拡張 昭和7年~22年	現在区名 昭和22年~
第七大区 三小区	大森村	大森村	大森村	大森町	大森区
三小区	不入斗村	不入斗村	入新井村	入新井町	
三小区	新井宿村	新井宿村			
五小区	馬込村	馬込村	馬込村	馬込町	
五小区	石川村	石川村			
五小区	雪ヶ谷村	雪ヶ谷村			
五小区	池上村	池上村			
三小区	市野倉村	市野倉村			
五小区	桐ヶ村	桐ヶ村			
三小区	堤方村	堤方村	池上村	池上町	
三小区	下池上村	下池上村			
四小区	徳持村	徳持村			
三小区	久ヶ村	久ヶ村			
五小区	道ヶ橋村	道ヶ橋村			
四小区	鶴ノ木村	鶴ノ木村			
五小区	嶺村	嶺村			
五小区	下沼部村	下沼部村	調布村	東調布町	
五小区	上沼部村	上沼部村			
四小区	蓮沼村	蓮沼村			大田区
四小区	道塚村	道塚村			
四小区	小林村	小林村			
四小区	安方村	安方村			
四小区	原村	原村	矢口村	矢口町	
四小区	今泉村	今泉村			
四小区	古市場村	古市場村			
四小区	矢口村	矢口村			
四小区	下丸子村	下丸子村			
三小区	女塚村	女塚村			蒲田区
三小区	御園村	御園村			
三小区	北蒲田村	北蒲田村	蒲田村	蒲田町	
四小区	蒲田新宿村	蒲田新宿村			
四小区	雑色村	雑色村			六郷区
四小区	八幡塚村	八幡塚村			
四小区	町屋村	町屋村	六郷村	六郷町	
四小区	高烟村	高烟村			
四小区	古川村	古川村			
四小区	糀谷村	糀谷村			羽田町
四小区	浜竹村	浜竹村			
三小区	下袋村	下袋村			
四小区	萩中村	萩中村	羽田村	羽田町	
四小区	鈴木新田	鈴木新田			
四小区	羽田獣師町	羽田獣師町			
四小区	羽田村	羽田村			

大田区史(昭和26年発行)より作成

(2)人口

①人口の推移と将来推計人口

大田区の人口は、令和7年(2025)1月1日時点で740,519人(住民基本台帳)であり、都内区市町村の中では、世田谷区、練馬区に次いで3番目に多い。

近年、人口は増加傾向を示しており、10年前の平成27年(2015)(1月1日時点)と比べると約33,000人増加している。なお、令和3年(2021)～令和5年(2023)は、新型コロナウィルス感染症拡大が影響したためか転出超過になったが、令和6年(2024)には再び増加に転じている。

令和6(2024)年を基準年として推計された将来人口を見ると、緩やかに増加した人口は、2042年に約735,800人のピークに達し、その後、急激に減少して、2070年に約710,572人になることが見込まれている。



図1-2-5 総人口の推移(住民基本台帳、各年1月1日時点)

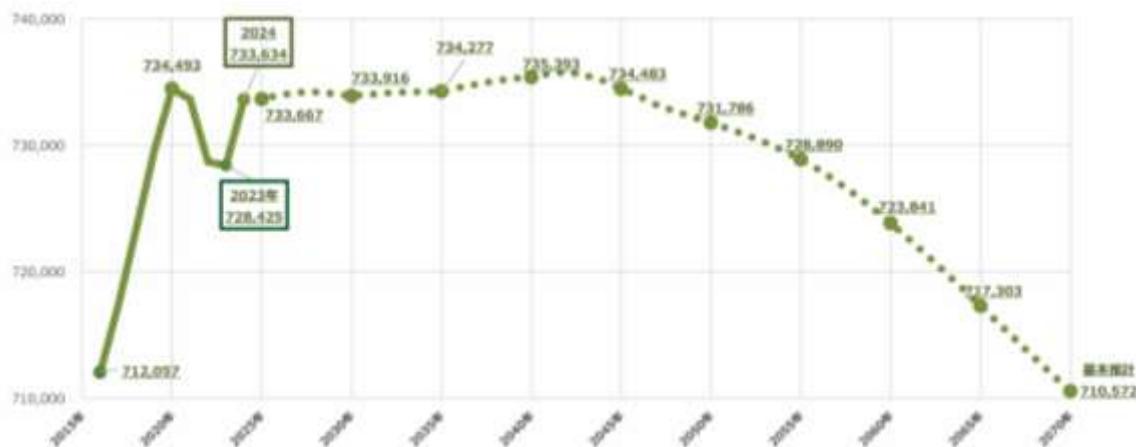


図1-2-6 将来人口の推計(住民基本台帳、各年1月1日時点)

②年齢別人口

要更新（2026.1.1 データ追記）

令和7年(2025)1月1日時点の年齢3区別人口をみると、0~14歳は74,263人(10.04%)、15~64歳は501,719人(67.80%)、65歳以上は164,000人(22.16%)となっている。

一方、令和6年(2025)1月1日時点の東京都全体では、0~14歳は1,540,731人(11.07%)、15~64歳は9,227,915人(66.33%)、65歳以上は3,143,256人(22.59%)となっている。

この結果から、大田区では、東京都全体と比較すると年少人口と老人人口がわずかに少なく、生産年齢人口がわずかであるが多いことが分かる。

表1-2-2 年齢3区別人口と割合(大田区と東京都全体)

	大田区(令和7年(2025)1月1日時点)			東京都全体(令和6年(2024)1月1日時点)		
	年少人口 (0~14歳)	生産年齢人口 (15~64歳)	老人人口 (65歳~)	年少人口 (0~14歳)	生産年齢人口 (15~64歳)	老人人口 (65歳~)
実数(人)	74,263	501,719	164,000	1,540,731	9,227,915	3,143,256
割合(%)	10.04	67.80	22.16	11.07	66.33	22.59

(3)土地利用

全区域(63.156平方キロメートル)が都市計画区域に指定されている。

令和3年(2021)時点において、宅地は50.6%、道路は32.6%、水面・河川等は5.7%を占めている。

表1-2-3 地目別土地利用面積と割合

	合計	農用地	森林	原野	水面・河川等	道路等	宅地	公園等	その他	未利用地
面積(ha)	6,315.6	3.2	1.7	62.6	358.4	2056.2	3196.6	293.3	215.0	128.8
割合(%)	100.0	0	0	1.0	5.7	32.6	50.6	4.6	3.4	2.0

※合計は、各項目の四捨五入の関係で合わない。

(4) 交通機関

鉄道は、JR東海道新幹線とJR横須賀線・湘南新宿ラインが区北西部を東西方向に通り、JR東海道本線(上野東京ライン)とJR京浜東北線が区中央部を南北方向に通っている。なお、区内にはJR京浜東北線の大森駅と蒲田駅の2駅がある。

その他の鉄道として、京急本線、京急空港線、東京モノレール、東急東横線、東急目黒線、東急多摩川線、東急大井町線、東急池上線、都営浅草線の9路線が区内を縦横に通り、各路線における駅の合計は39駅にのぼる。乗降客数等から区の中心的な駅として、蒲田駅(JR京浜東北線、東急池上線、東急多摩川線)、京急蒲田駅(京急本線、京急空港線)、大森駅(JR京浜東北線)があげられる。蒲田駅と京急蒲田駅は約800メートル離れていることから、区内外の移動の利便性や沿線まちづくりに寄与することを目的に、現在、蒲田駅(東急電鉄)と京急蒲田駅(京浜急行電鉄)を結ぶ鉄道路線計画「蒲蒲線(又は新空港線)」が検討されている。

道路は、東京都中央区を起点とし大阪市を終点とする国道1号が区西部寄りを南北に縦断するとともに、同じく中央区を起点とし横浜市を終点とする国道15号が区中央を南北に縦断している。また、東京湾を取り巻く千葉県、東京都、神奈川県の海岸沿いを通る国道357号(東京湾岸道路)が区東部及び羽田空港敷地内を縦断している。

広域交通網では、羽田インターチェンジを始めとする3つのインターチェンジを有する首都高速1号や首都高速湾岸線が、区東部を南北に縦断している。

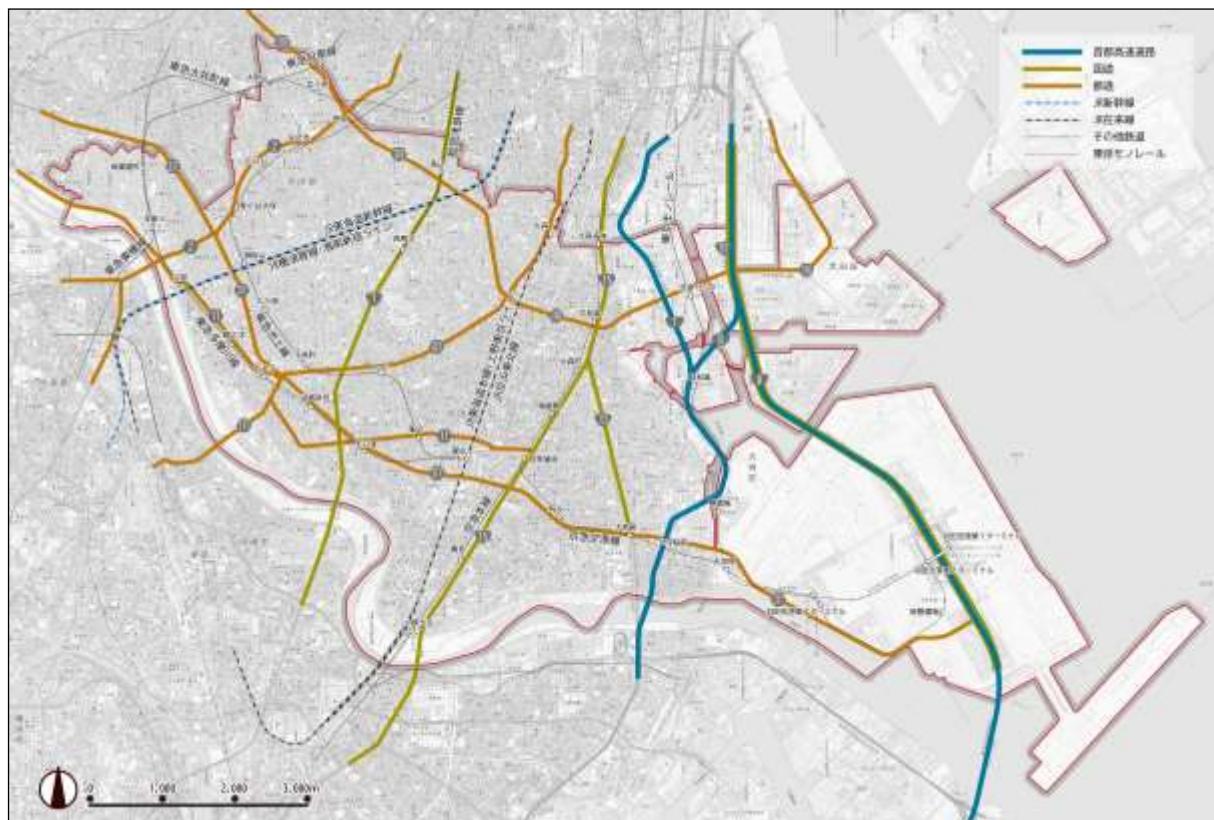


図1-2-7 交通網

(5)産業

令和2年(2020)の国勢調査によれば、15歳以上の就業者総数347,458人のうち、第1次産業就業者は454人(0.1%) [特別区部0.2%]、第2次産業就業者は58,661人(16.9%) [特別区部13.8%]、第3次産業就業者は272,733人(78.5%) [特別区部81.9%]、不明(分類不能)は15,610人(4.5%) [特別区部4.2%]である。

経年では、第1次産業の就業者数割合はほぼ横ばいで推移し、第2産業第は減少傾向を示している。3次産業は一時減少するものの、平成22年(2012)以降は増加傾向を示している。

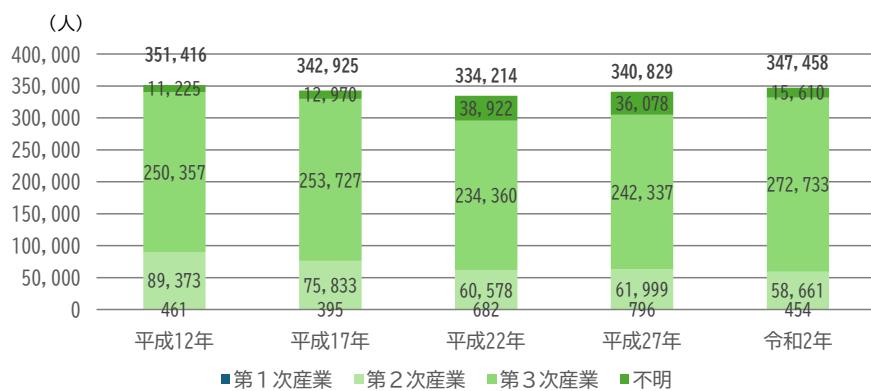


図1-2-8 産業別就業人口

①農業

区内には10数軒ほどの農家と約3.2ヘクタールの農用地がある。そこでは、ジャガイモ、大根、ナス、シクラメン等が年間を通して生産されている。

なかでも、馬込大太三寸人参と馬込半白節成胡瓜は、大田区に伝統野菜として位置付けられている。

■馬込大太三寸人参

馬込大太三寸人参は、昭和25年(1950)に農林省に種苗名称登録された西洋ニンジンの改良種である。鮮やかな朱色で、長さは10センチメートル(3寸)程度、短い円錐の尻つまり形をしており、根の先が丸みを帯びているのが特徴で、芳香があり、柔らかく甘い。



図1-2-9 馬込大太三寸人参



図1-2-10 馬込半白節成胡瓜

■馬込半白節成胡瓜

馬込半白節成胡瓜は、明治30年代(1895)から昭和30年(1955)ころまで栽培されていた。馬込で特産される、ヘタの部分が緑色で下が色白、茎の節ごとに実が成る「胡瓜」ということでこの名が付けられた。

②工業

要確認（最新データ確認）

令和3年(2021)経済センサス-活動調査(令和6年3月公表)によると、大田区には 28,532 の事業所が立地しており、そのなかでも製造業は 3,584 事業所が立地し、東京 23 区内最大の集積となっている。

こうしたなか、従業員 1 ~ 9 人の工場が全工場の 75% 以上を占めており、区内工場の多くが従業員の少ない小規模な工場であることが分かる。なかでも、生産用機械器具製品、金属製品、はん用機械器具製品等の、機械金属加工のものづくり企業が多い。

③商業

令和3年(2021)経済センサス-活動調査(令和6年3月公表)によると、卸売業・小売業は、事業所数 6,222 店、従業者数 79,735 人、年間商品販売額 2 兆 8,252 億 6,300 万円となっている。これは、区内全産業に対して、事業所数が 21.8%、従業者数が 22.5%、年間商品販売額が 27.2% を占めていることになる。

卸売業・小売業、宿泊業、飲食業、サービス業等が集積する商店街数の多さとともに、銭湯も東京 23 区最大級の店舗数を誇っており、大田区の特色の一つである。

表 1-2-4 産業大分類別の事業者数、従業員数、売上(収入)金額（令和3年(2021)）

	事業所数	構成比 (%)	従業者数 (人)	構成比 (%)	売上金額 (百万円)	構成比 (%)
	28,532	100.0	355,138	100.0	10,378,745	100.0
農林漁業	22	0.1	418	0.1	1,461	0.0
鉱業, 採石業, 砂利採取業	—	—	—	—	—	—
建設業	2,160	7.6	18,384	5.2	488,122	4.7
製造業	3,584	12.6	33,659	9.5	4,426,676	42.6
電気, ガス, 熱供給, 水道業	21	0.1	321	0.1	4,747	0.0
情報通信業	548	1.9	15,049	4.2	290,528	2.8
運輸業, 郵便業	1,296	4.5	68,325	19.3	586,138	5.6
卸売業, 小売業	6,222	21.8	79,735	22.5	2,825,263	27.2
金融業, 保険業	339	1.2	5,537	1.6	189,611	1.8
不動産業, 物品販賣業	3,100	10.9	11,180	3.1	207,260	2.0
学術研究, 専門・技術サービス業	1,287	4.5	8,727	2.5	100,854	1.0
宿泊業, 飲食サービス業	3,223	11.3	23,755	6.7	205,227	2.0
生活関連サービス業, 娯楽業	1,859	6.5	10,757	3.0	184,069	1.8
教育, 学習支援業	701	2.5	7,192	2.0	141,768	1.4
医療, 福祉	2,491	8.7	38,256	10.8	279,376	2.7
複合サービス業	81	0.3	1,224	0.3	4,395	0.0
サービス業(他に分類されないもの)	1,598	5.6	32,319	9.1	446,250	4.3

※売上金額は、必要な事項の数値が得られた事業者のみを対象に集計した値であるため、表中の事業所数(従業員数)の売上金額の合計を示しているわけではない。

表1-2-5 従業者規模別の事業所数と従業者数（令和3年(2021)）

従業者規模	事業所数	構成比(%)	従業者数(人)	構成比(%)
	28,532	100.0	355,138	100.0
従業者規模	1~4人	16,370	57.4	34,745
	5~9人	5,347	18.7	35,126
	10~19人	3,463	12.1	46,895
	20~29人	1,370	4.8	32,584
	30~49人	887	3.1	33,361
	50~99人	538	1.9	36,839
	100~199人	230	0.8	31,708
	200~299人	75	0.3	18,223
	300~499人	51	0.2	19,192
	500人以上	46	0.2	66,465
出向・派遣従業員のみ		155	0.5	0

(6)観光

「平成29年度 観光統計・マーケティング調査報告書(平成30年(2018)3月)によれば、大田区の宿泊者数は年間約152万人(平成29年(2017))となっており、平成24年(2012)と比較すると29%増である。一方、東京都全体の同期間では18%増である。なお、大田区の外国人宿泊者数は年間約32万人(平成29年(2017))であり、全体の20.9%を占めている。

区内の主な施設(羽田空港を除く)の年間利用者数は、約461万人(平成29年(2017))となっている。また、区内の主なイベントへは年間約128万人(平成29年(2017))、商店街で開催されるイベントは約35万人(平成29年(2017))が来場している。

一方、羽田空港と成田空港の国際線ターミナル搭乗待合ロビーで訪日外国人を対象に実施したアンケート調査の結果を「令和5年国・地域別外国人旅行者行動特性調査(令和5年(2023))」で見ると、東京を訪れた外国人の目的は、最も多いのは「観光・レジャー」で85.1%、次いで「親族・知人訪問」が4.2%、「その他ビジネス」が3.1%であった。

なお、「大田区商店街調査報告書(平成26年(2014))」には、大田区の主な観光資源として、以下のモノやコトがあげられている。

表1-2-6 大田区の主な観光資源（「大田区商店街調査報告書(平成26年(2014))より」）

・黒湯温泉(銭湯)への入浴	・町工場の見学
・羽根つき餃子などの地元名物の体験	・池上本門寺などの神社・仏閣・旧跡めぐり
・日本の暮らしを感じる商店街でのお買い物	・大森海苔のふるさと館での海苔付体験
・四季を感じる催し	・東京湾のクルーズ・屋形舟
・水辺体験	・花卉や果物を扱う卸売市場の見学(大田市場)
・着付け・茶道・習字等の日本文化体験	・野鳥公園でのバードウォッチング
・郷土博物館・龍子記念館などの所蔵品の鑑賞	

1-3. 歴史的環境

要確認（図（写真）掲載の可否）

大田区の歴史は、石器製作の際に生じた剥片の出土から、遅くとも後期旧石器時代（約3万年前～1万年前）には人々が生活していたとされるところから始まる。

その後に続く、大森貝塚をはじめ、竪穴住居や土器・石器等が多数発見されている縄文時代（約1万年前～2300年前）、台地部に大きな集落が形成された弥生時代（約2300年前～3世紀頃）、多摩川左岸に大小多数の古墳群が築かれた古墳時代（3世紀～7世紀）から出土する様々な遺跡や遺物等が、大田区における原始・古代の人々の、暮らしの場や形態等の変化を見ることができる。

中世や近世においては、時の支配者や権力者等による土地や人の支配と統治が起こっている。また、この時代には日蓮宗の開祖日蓮が池上の地で入滅したことが、その後の大田区の歴史的風致の形成にとって大きな影響を及ぼすこととなっている。

近世後半から近代（明治期）以降は、市場経済化が進み、海苔養殖や麦わら細工をはじめとする様々な産業が興るとともに、地域の発展と度重なる市町村合併による行政区域の変化の激しい時代を経ることとなった。

そして現代になると、鉄道の発展が目覚ましく、併せて市街地化が進展して宅地の造成と工業用地の整備が急速に進み、一層の都市化を迎えることとなる。しかし、これまでの長い年月の中で形成され根付いてきた信仰や伝統行事、規則やルール等を含む地域文化は、今も地域やそこに暮らす人々に継承され、息づいている。



図1-3-1 時代区分



図1-3-2 区内の主な歴史文化資源

(1)原始(旧石器時代、縄文時代、弥生時代)

①旧石器時代

旧石器時代(約250万年前～1万2000年前)の人々は、一ヶ所に定住せず、小さな集団で移動しながら狩猟採集生活を送っていた。大田区では、こうした旧石器時代の人々の生活の様子を久原小学校内遺跡に見ることができる。

昭和53年(1978)、武蔵野台地最南端、多摩川と呑川に挟まれた久が原台地上に位置する久原小学校で、校舎と体育館の改築時に地面下約6メートルの地点から、炭化物片を多量に含む焼土や火熱による赤化と火割れの著しい礫群、また石器製作工程で生まれる剥片が多数出土した。調査の結果、約2万年前(後期旧石器時代に該当)の調理場や石器製作場等であるとされ、この頃よりこの地で人々が生活していたことが裏付けられた。しかし、この遺跡からは限られた範囲にわずかな遺物しか残っていなかったことから、小集団が短期間居住していたものと想像されている。



図1-3-3 久原小学校内遺跡

②縄文時代

旧石器時代から徐々に温暖化が進み、気温上昇とともに海面が上昇し、海面が現在の標高10メートル付近にあった縄文時代(約1万2000年前～2500年前)では、定住型の狩猟採集生活に代わっていった。特に、海の幸を享受できるようになったことが、区内で発見された雪ヶ谷貝塚、馬込貝塚、大森貝塚、下沼部貝塚等で分かる。

特に、東急池上線雪ヶ谷駅の南東約550メートルの呑川に面にする雪ヶ谷貝塚は、広範囲に約6500年前～5000年前(縄文時代前期に該当)の竪穴住居址31基をはじめ、土器や石器の生活道具等、多数の遺物が散布しており、大規模な集落であったことが想像されている。また、塚で出土した貝の種類は、ハマグリ等の海で採取できるものが中心だった。

また、明治10年(1877)、アメリカ人動物学者エドワード・シルベスター・モース氏により発見・発掘され、日本で最初の学術的発掘調査が行われたことで有名な大森貝塚は、約4000年前～2300年前(縄文時代後期～晩期に該当)の土器や土版、球状土製品、打



図1-3-4 大森貝塚(塚)



図1-3-5 大森貝塚(出土品)

製石斧、骨角器等が出土している。また、塚で出土した貝の種類はテングニシ、バイ、サザエ、カキ等が多く含まれていた。その後の調査からは住居跡、装身具、魚や動物の骨等が大量に見つかっている。なお、本遺跡は国指定の史跡である。

③弥生時代

稻作が始まる弥生時代(約 2500 年前～3 世紀半ば)、区内では、田畠の跡は発見されていないが、稻穀の痕のある土器や炭化米が出土している。特に、多摩川と呑川に挟まれた台地上に確認された久ヶ原遺跡では、台地下の沖積低地に水田を作り、農耕を中心とする生活が営まれていたことが想像されている。久ヶ原遺跡は、複数回の調査の結果、11 万平方メートルに及ぶ遺跡規模内に約 1000 軒を超える竪穴式住居が存在するなど、南関東だけでなく日本を代表する弥生時代の遺跡として知られている。



図 1-3-6 久ヶ原遺跡

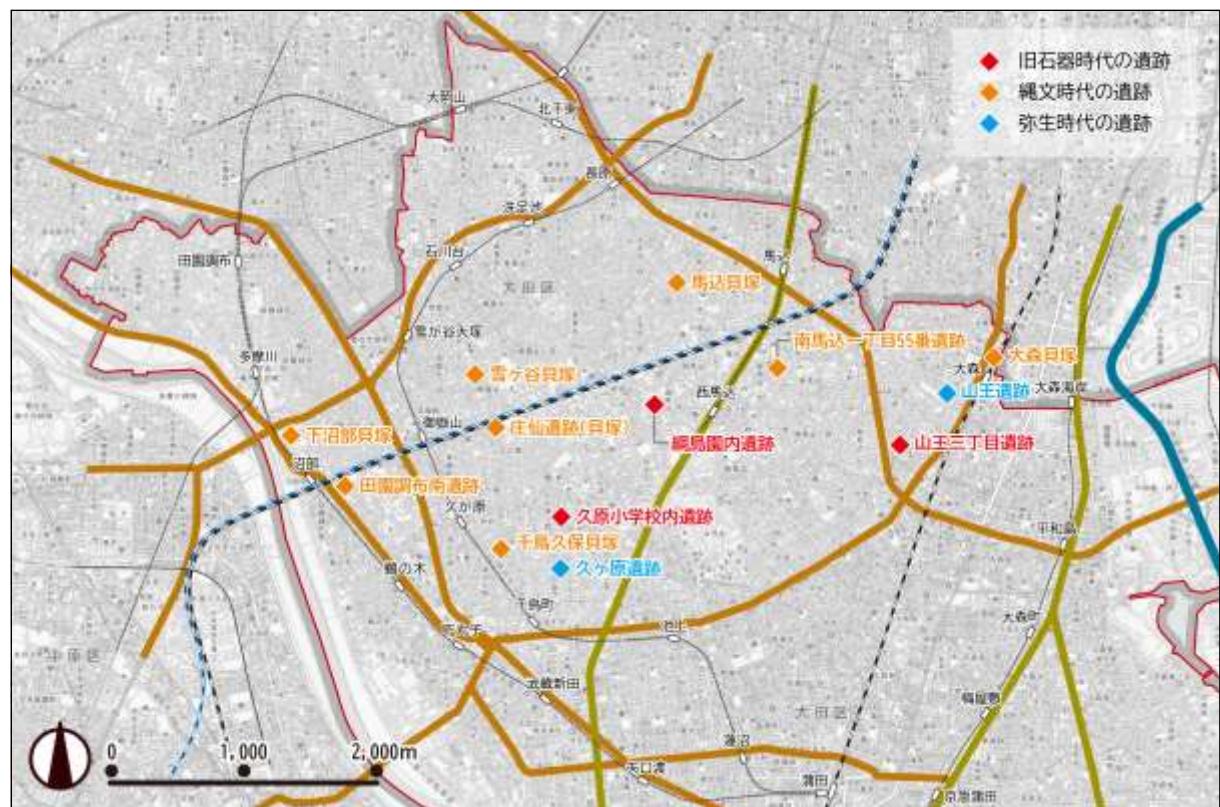


図 1-3-7 原始時代(旧石器時代、縄文時代、弥生時代)の遺跡分布

(2)古代(古墳時代(飛鳥時代)、奈良時代・平安時代)

①古墳時代(飛鳥時代)

大田区は古墳群の密集地であり、その大部分は田園調布からのびる多摩丘陵地帯の、鶴の木・池上・馬込・山王と連なる台地上にある。これらは土を盛った高塚式の古墳で田園調布古墳群(荏原台古墳群の内、田園調布を中心とする古墳群のこと)と呼ばれ、長径 100 メートル、前方部幅 42 メートル、高さ 6 メートル、後円部径 60 メートル、高さ 9 メートルの亀甲山前方後円墳を筆頭に、4 基の前方後円墳、47 基の円墳よりなる大集合墳を形成している。

特に、亀甲山古墳は都内最大級の規模で、古くから武蔵国の国造クラスの人物の墳墓ではないかと推定されており、昭和 4 年(1929)に国指定の史跡に指定された。近くに宝萊山古墳や觀音塚古墳等もあり、亀甲山古墳に匹敵するものであったが、現在は宅地化により原形がほとんど確認できない。

觀音塚古墳からは文化 14 年(1817)に人物埴輪が出土し、現在は照善寺に保管されている。また、亀甲山古墳の南側にある浅間神社敷地内からは人頭と動物頭の埴輪や無数の破片が発見されており、ここも古墳であったことが知られている。

なお、宝萊山古墳と亀甲山古墳に挟まれるように多摩川を望む台地縁辺に位置している墳墓を多摩川台古墳群と呼び、田園調布古墳群に属す墳墓群である。



図 1-3-8 亀甲山古墳(大田区教育委員会提供/重要文化財)



図 1-3-9 觀音塚古墳からの出土品(人物埴輪)

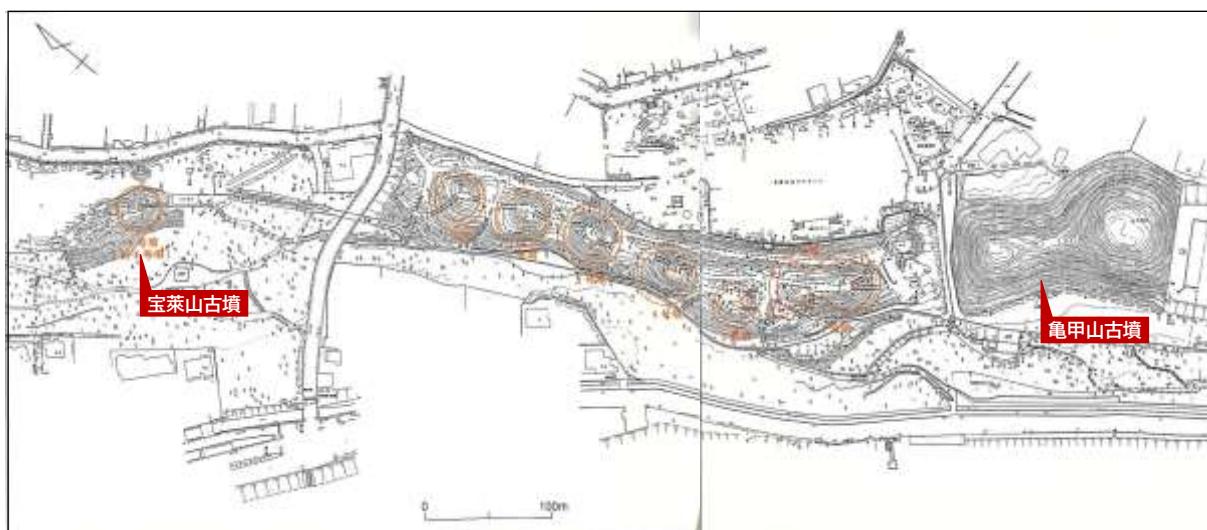


図 1-3-10 多摩川台古墳群の分布

円墳では調布大塚小学校の裏にある鶴の木大塚古墳が原形をよく保っており、規模も大きく、古くから「大塚」と呼ばれて付近の地名にもなっている。また沼部駅に近い東光院の裏にも原形をよく残した円墳があり、さらに小規模ながら蒲田周辺の沖積低地にも塚と称される古墳時代末期の円墳がいくつか現存している。

古墳時代末期になると、台地の斜面に横穴を掘つて遺体を葬ることが広く行なわれるようになる。当区は都内最多といえるほど横穴古墳(横穴墓)が密集群在する地域であり、特に上沼部群、下沼部群、鶴の木・光明寺群、久が原・根岸群、小池群、塚越群、本門寺・桐ヶ谷群、久保・平賀群(馬込)、新井宿・山王群等は有名で、それらの場所からローム層の中に掘られた横穴古墳の大群が発見されている。

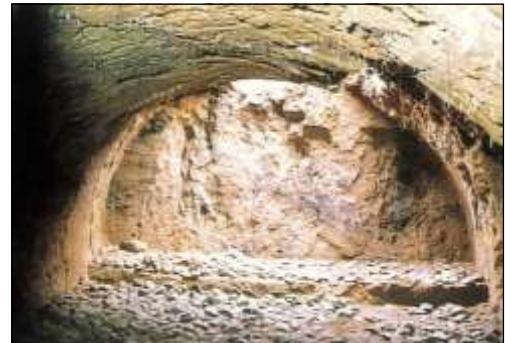


図 1-3-11 横穴墓(山王遺跡)

②奈良時代・平安時代

奈良・平安時代は、日本列島に律令国家(律令制)が成立した時代である。

律令制とは、皇室を中心とする貴族階級が全国の人民と土地を直接統治するための中央集権的な政治体制のことである。国家の支配下におかれた人々は戸籍に登録され、その地で口分田が与えられた。また土地の管理が進められた結果、碁盤目状の土地区画(条里制)が行われ、班田収授法の適用を受けるとともに、各種の税を負担した。国家の支配は東北南部から九州南部に及び、地方の「国」(ほぼ今の都道府県に相当)とその下の「郡」が行政単位となり、それぞれの中心には国府(国衙)と郡家(郡衙)という役所(官衙)が置かれた。

大田区は武藏国荏原郡にあたる地域に含まれ、『倭名類聚抄(倭名抄)』によれば、荏原郡には蒲田、田本、満田、荏原、覚志、木田、桜田、駅家の9郷が存在していた。このうち、大田区に含まれるものと『日本地志料』に従うと、蒲田郷を中心に田本、満田、荏原、覚志、駅家の郷の一部であると推測されている。区内で当時代の遺跡は27基が確認されており、低地部の貝塚や官衙関連遺跡、台地部の火葬墓群に大別される。特に、低地部の十二天遺跡からは、9世紀代の掘立柱建物や銅製丸鞘、祭祀に使用されたと考えられる人型の木製品等が出土している。こうした特殊な遺物が多いことなどから、十二天遺跡は蒲田郷の官衙に関連する遺跡であると推定されている。



図 1-3-12 十二天遺跡から出土した丸鞘

(3) 中世（鎌倉時代、室町時代（南北朝時代））

中世（鎌倉・室町時代）は、朝廷から任じられた国府の長官（国司）が公領を支配する体制と、皇族や貴族、大寺社が各地に荘園を展開する中で、武士が台頭し公権力の一角を担い領域を拡大させていった時代である。武士は、宮廷警備のほか、地域間紛争の鎮圧を通じて全国に主従関係を拡げて武家政権を樹立した。武家政権は、12世紀末～13世紀の鎌倉幕府から14世紀前半の南北朝の動乱を経て、14～15世紀の室町幕府へと発展し、15世紀後半には各地に戦国大名が現れて強力な領国支配を進めていった。

当時代、後の 大田区の歴史文化等に多大な影響を及ぼした出来事がある。日蓮宗の開祖である日蓮が、弘安5年（1282）10月13日、武藏国荏原郡千束郷池上村の地頭である池上右衛門大夫宗仲の館邸で入滅したことである。詳細な入滅の場所は、現在の池上大坊本行寺の所在地とされる。

弘安5年（1282）9月8日、61歳になる日蓮は、それまでの9年間を過ごしてきた身延山に別れを告げて、病気療養のため常陸へ湯治に向かう途中の9月18日、病状悪化のため池上の地に身を寄せたが療養の甲斐なく亡くなっている。その後、池上衛門大夫宗仲が屋敷の一部を寄進したことから、池上本門寺がはじまるといわれる。

池上本門寺は、江戸時代に大名や多くの町人から信仰を集め、現在も、境内に五重塔や宝塔（いずれも国指定の有形文化財（建造物））、経蔵、石段等の歴史的な建造物が残るだけでなく、お会式や千部会等の日蓮の供養に関する地域が一体となった催事が行われる寺院となっている。



図1-3-13 日蓮聖人坐像（木造）
(大田区教育委員会提供・池上本門寺蔵/重要文化財)



図1-3-14 池上本門寺宝塔



図1-3-15 池上本門寺大堂

(4)近世（安土桃山時代(戦国時代)、江戸時代）

永禄11年(1568)、織田信長が足利義昭を奉じて上洛し、京都を制圧する。その後、足利義昭が征夷大将軍になるが、元亀4年(1573)、信長は義昭を京都から放逐すると、室町幕府は事実上崩壊して織田政権が確立し、天正4年(1576)、信長の安土城築城によって安土桃山時代が始まる。

天正5年(1577)、信長は領地の活性化を図る目的で「楽市楽座令」を発布する一方、天正7年(1579)、安土城下浄巌院で行わせた浄土宗と法華宗(日蓮宗)の宗論(安土宗論)で敗北する法華宗(日蓮宗)を弾圧したとする仏教政策も行っている。信長はその後も勢力を拡大するが、天下統一の目前、天正10年(1582)の本能寺の変で自害した。

その後、信長の後見人となった豊臣秀吉は、天正11年(1583)大坂城の築城を開始し、天正18年(1590)天下統一を果たした。慶長3年(1598)秀吉が亡くなると、5大老の筆頭であった徳川家康が台頭して実質的な政権運営者となるものの、慶長5年(1600)反家康勢力であった石田三成を始めとする軍勢と天下を二分する関ヶ原の戦いが勃発する。慶長8年(1603)、戦に勝利した家康は征夷大将軍となり、江戸時代が始まる。

家康は、荏原郡(現大田区)を江戸南郊の穀倉地帯と位置づけて、ほとんどの土地を幕府直轄領とした。また、新井宿村を知行させた旗本木原吉次らに江戸城修築を行わせ、治水の専門家である小泉次太夫吉次に江戸南郊の六郷、稻毛、川崎等の穀田を開発するため、六郷用水や二箇領用水を開掘させている。さらに酒井左衛門尉忠次を普請奉行にして六郷橋を竣工させて江戸の入口である東海道の交通を一層便利にした。

江戸中期になると、大森海岸で産する海苔が幕府御膳御用に指定されると特産物として脚光を浴び、東海道の往来が一層増していった。大森付近は品川宿と川崎宿の間の宿として栄え、道中常備薬の和中散や土産物の大森麦わら細工等を買い求める旅人で賑わうなど、商業の発展が見られた。また、大きな梅園を持つ休息所の梅屋敷や、その周辺でとれる梅を加工した梅びしお(練り梅)等が大田区の名所・名物として有名になっている。

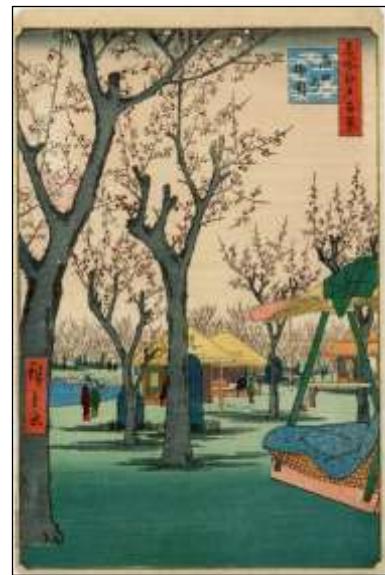


図 1-3-16 蒲田の梅園(歌川広重作)
「名門江戸百景(安政4年(1857))」



図 1-3-17 土産物屋(麦わら細工)
「江戸名所図会(天保5年(1834)~7年(1836))」

(5) 近代（明治期、大正期、昭和期（戦前））

①大森区と蒲田区の誕生

慶応3年(1867)10月、江戸幕府第15代将軍徳川慶喜が政権返上を明治天皇へ奏上し、天皇が奏上を勅許した大政奉還が行った。江戸幕府は、翌年の慶応4年(1868)4月に江戸城を明け渡し、260余年続いた幕藩体制は終わりを告げて、年号が「明治」と改められた。また、慶応4年(1868)7月、天皇は「江戸」を「東京」と改称する詔勅を出し、「東京府」が置かれることとなった。明治元年(1868)、暫定的な武蔵県知事として、それまで関東代官であった山田政則、松村長為、桑山放が任命され、翌年(1869)、小菅県、品川県、大宮県の3県が置かれて、それぞれの県知事となっている。

この時、大田区は、品川県に含まれている。なお、当時の品川県の範囲は、現在の練馬・中野・杉並・新宿(一部)・渋谷・世田谷・目黒・大田・品川の九区、武蔵野・三鷹・保谷・府中・国分寺・川崎・横浜(一部)・所沢の8市などにあたる。

明治4年(1871)の廃藩置県後の大区小区制、明治11年(1878)の郡区町村制、さらには明治22年(1889)の市町村制により、大田区を含む東京地域の自治体編成が繰り返し行われた。その後は移管や合併が行われ、明治26年(1893)の東京府が概ね現在の東京都域となった。

昭和7年(1932)に編成・合併によりできた大東京35区の際に、現在の当区に該当する大森区と蒲田区ができている。なお、その時(昭和7年(1932)時点)の各区の人口は、大森区が169,068人、蒲田区が105,716人である。

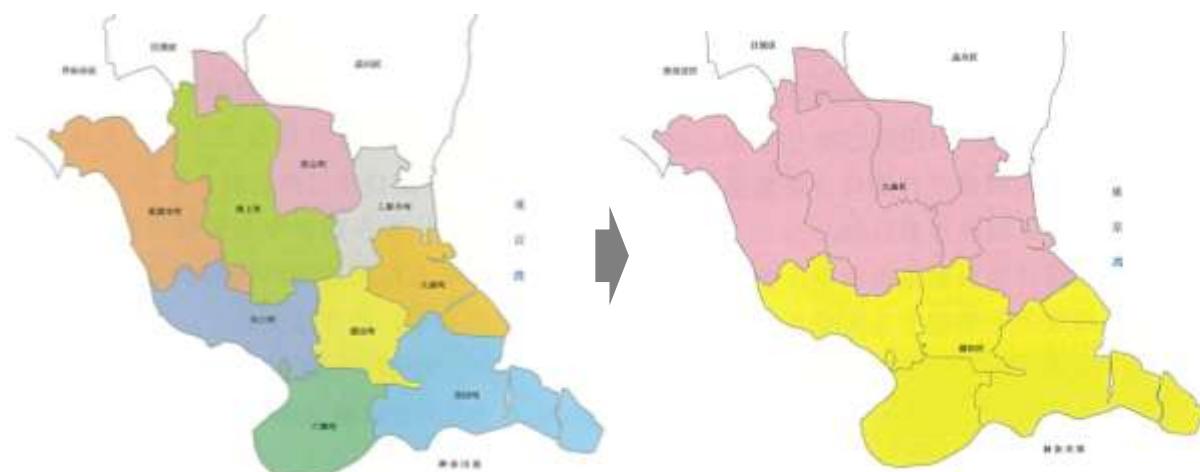


図 1-3-18 明治 22 年(1889)当時の大田区域

図 1-3-19 昭和 7 年(1932)当時の大田区域

②交通の発展

慶長6年(1601)、徳川家康は「東海道」に伝馬制を定め、江戸と京・大阪の交通を整備した。参勤交代が制度化されて往来がますます多くなると、宿場が栄えることとなり、大森付近は品川宿と川崎宿の間の宿として栄えている。

この「東海道」は、明治・大正期になると、さらなる交通量の増加に伴って、ほとんどが拡幅されているものの、大森本町二丁目から大森東三丁目にかけての「美原通り」等が往時の幅員が残され面影が残る。その他、江戸時代、相州(神奈川県)平塚の中原から江戸へ通じる近道として好まれた「中原街道」も現在は都道2号となり、区内では田園調布～千束(洗足池)を繋ぐ重要な路線の一つとなっている。

鉄道では、明治34年(1901)、京浜電鉄が六郷橋から大森停車場前間で営業を開始している。また、関東大震災で家を失った人々が郊外の閑静な地を求めて、大田区を始めとする市街地周辺に移り住むようになり、それを後押ししたのが、大正末期から昭和初期に開通した東急池上線や目蒲線¹などの鉄道である。なお、目蒲線(目黒駅～蒲田駅)は、渋沢栄一が中心となり開発を進めた高級住宅地田園調布の交通を確保するために整備したものである。

空港は、昭和6年(1931)、面積53ヘクタールに、延長300メートル、幅15メートルの滑走路1本を設けて開港した、我が国初の国営民間航空専用空港「東京飛行場」が羽田空港の始まりとなる。羽田空港は、昭和13年(1938)から昭和14年(1939)に飛行機の大型化に伴い、延長800メートル、幅80メートルの滑走路が2本整備している。

なお、戦後は、占領軍に一時接收されるが、後に返還され、その後のさらなる航空需要に対応するため拡張工事が繰り返されて、平成22年(2010)に4本の滑走路を持つ現在の姿となっている。



図 1-3-20 美原通り(旧東海道:往時の幅員が残っている区間)



図 1-3-21 田園調布を通る目蒲線(昭和7年(1932))



図 1-3-22 羽田空港(当時は東京飛行場)(昭和6年(1931))

¹ 目蒲線は平成12年(2000)に多摩川駅を境に路線が分割(東急多摩川線、東急目黒線)され、目蒲線の名称は無くなっている。

③近代工業の誕生

江戸時代から明治期の主要産業は海苔の養殖や麦わら細工であった。近代工業化は、明治41年(1908年)、東京瓦斯大森製造所の建設(大森町字東浜(現大森東3-28))から始まり、本格化したのは第一次世界大戦(大正3年(1914)～大正7年(1918))前後に見られた東京湾沿いの集積と考えられている。

関東大震災(大正12年(1923))後は、工場進出の条件が整った多摩川沿いの耕地整理地区内に都心から多くの工場が移転した。その後、昭和になると次第に戦争の色が濃くなり、戦時中は武器類を始めとする軍需品が生産されたが、戦後は軍需産業から転換を図るため、日用品や農具等が生産された。昭和25年(1950)の朝鮮戦争による特需も影響して、その後の地域経済は大きく成長した。



図1-3-23 東京瓦斯電気大森工場(※要更新)

④住宅地田園調布の建設

大正4年(1916)、荏原郡の地主有志数名が、経済界の重鎮渋沢栄一を訪ね、荏原郡一帯の開発計画を説明し実施を依頼したことが田園調布建設のはじまりである。

渋沢栄一は、その後賛同者を得て、大正7年(1918)9月に田園都市株式会社を設立し、現在の洗足、大岡山、奥沢、田園調布の土地買収に乗り出して、大正10年(1921)11月には計画面積42万坪を上回る48万坪の買収を完了した。

関東大震災直後に開始された田園調布地区での土地分譲は、これと並行して進められた分譲後の住民の足を確保する鉄道敷設等により順調に進んだ。田園調布は、それより先に販売されていた洗足地区のような直行グリッドを基本とする従来の区画割ではなく、環状線と放射線が交差するエトワール形式と呼ばれる優美なまちなみを形成した。

田園調布地区は、その他の開発地と異なり、土地譲渡契約書には、①土地は住宅とこれに必要な附属の建物・庭園のみに用いること、②土地購入後1年6か月以内に住宅を建築すること、③許可なく1区画の土地を分割しないことなどが記され、さらに細かい規定として、⑦建物は3階以下とする、⑧建物敷地は宅地の5割以内とする、⑨住宅の工事費は坪当たり120円²以上とするなどの条件を付けられてい



図1-3-24 田園調布駅前(昭和35年(1962))



図1-3-25 田園調布のまちなみ(昭和36年(1961))

² 大正12年(1926)の公務員初任給は75円であった。

た。これは、現在の建築協定にも匹敵する紳士協定としての建築規則であり、当時より「田園都市」としての環境や景観の維持が図られていた証である。



図 1-3-26 エトワール形式と呼ばれる多摩川台住宅地(田園調布地区)の町割

⑤馬込文士村の形成

大正 12 年(1923)の関東大震災を契機に昭和初期までの期間、大森駅周辺の山王から馬込にかけて開けた住宅地に多くの文士たちが移り住んだ地が、いわゆる「馬込文士村」である。

最も早かったのは『人生劇場』や『空想部落』で有名な尾崎士郎である。大正末期から昭和初期までの期間に、ノーベル文学賞受賞者の川端康成や、詩人・歌人の北原白秋をはじめとする 80 名余りの作家たちが一時期馬込に暮らし、昭和文学発祥の地と言われるまでになった。



図 1-3-27 馬込文士村に残る尾崎士郎旧宅(記念館)

⑥戦争(第二次世界大戦)による罹災

第二次世界大戦下において、当区(当時の大森区と蒲田区の 2 つ地区)に対する空襲は、昭和 19 年(1944)12 月 11 日に大森区入新井一丁目、山王一丁目が罹災したのにはじまり、主たるものだけで 13 回に及んでいる。その中でも、特に、昭和 20 年(1945)4 月 15 日の空襲は、

B29爆撃機200機の波状攻撃により区内最大の被害となり、死者629人、負傷者1,254人、罹災住宅戸数53,077戸、罹災者204,681人を出した。

こうした度重なる空襲によりもたらされた大田区の被害総数は、『東京都戦争被害(昭和23年(1948)7月、東京都総務部調査課)』によれば、大森区では、死者283人、重軽傷者1,363人、罹災者104,518人、同住宅戸数26,883戸、蒲田区では、死者618人、重軽傷者666人、罹災者156,817人、同住宅戸数40,197戸とされている。また、これらの罹災住宅戸数に基づいて、昭和16年(1941)の全戸数に対する割合をみると、大森区では約41%、蒲田区では約68%の住宅が焼失したことになる。



図1-3-28 被災状況
(大森六丁目付近(昭和20年(1945)))



図1-3-29 被災状況
(蒲田警察署前通り(昭和20年(1945)))

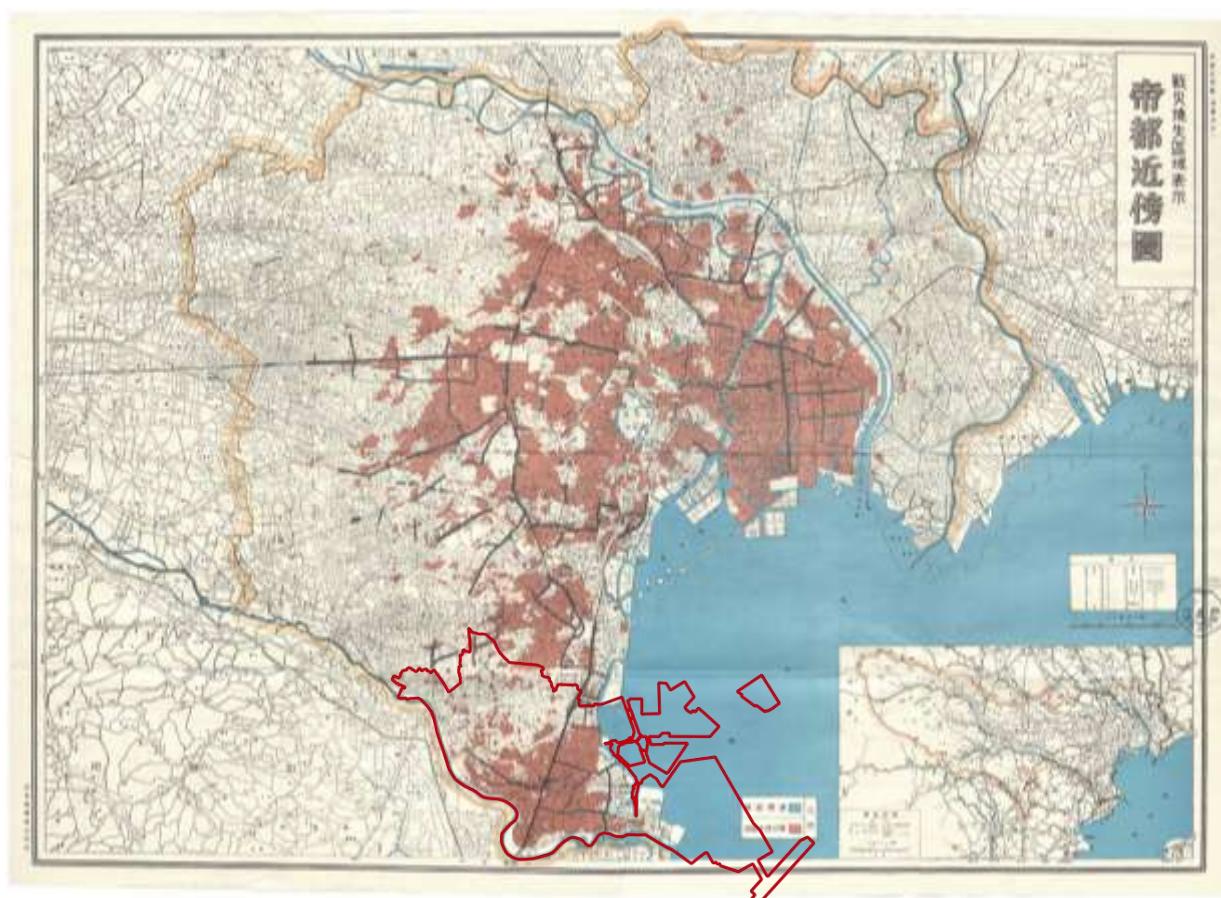


図1-3-30 戦災焼失区域表示(帝都近傍図)(昭和21年(1946)) ※加工(現在の区域(赤線)を重ね合わせ)

(6) 現代（昭和期（戦後）、平成期、令和期）

① 大田区の誕生

昭和 22 年（1947）3 月、戦災による被害が大きかった東京は、それまでの東京 35 区を 22 区に統合整理した。なお、同年（1947）8 月に練馬区が板橋区から分離独立して 23 区になる。

この時、大森区と蒲田区は合併して大田区となった。昭和 22 年（1947）5 月、日本国憲法の施行に伴い地方自治法が施行され、東京都の区は特別区となり、市町村と同様に地方公共団体（特別地方自治体）となった。

なお、「大田区」の名称は、それまでの「大森区」と「蒲田区」のそれぞれの名称から 1 字ずつ取ったものである。

② 戦災復興

東京都は昭和 21 年（1946）に「東京戦災復興都市計画」を決定したが、昭和 24 年（1949）のドッジライン（財政金融引き締め政策）によって、昭和 25 年（1950）に計画の縮小見直しが行われた。その結果、区内では、大森駅と蒲田駅を中心とした地域で昭和 30 年代～40 年代に戦災復興土地区画整理事業が実施され、現在の道路や街区の原型が整備された。

③ 令和島の編入

空港臨海部の中央防波堤埋立地のうち、中央防波堤より南側の敷地の西部に位置する部分が、令和元年（2019）10 月に大田区への帰属が決定し、翌年令和 2 年（2020）6 月に編入されて、面積 1.03 平方キロメートルの「令和島」が誕生した。なお、令和島は、海底トンネルにより、南西の城南島と結ばれている。



図 1-3-31 令和島

1-4. 大田区に関わりのある人物

要確認（図(写真)掲載の可否）

大田区の歴史と関わりのある人物のうち、大田区の歴史的風致に関連する人物を取り上げ、その人物と関わりのある場所や施設を掲載する。※生没年には推定年を含む。

表 1-4-1 大田区の歴史的風致と関わりのある主な人物

肖像・関連施設	名前	概要
	にちれん 日蓮 1222～1282 鎌倉時代	日蓮宗の開祖。12歳で千葉県の清澄寺に入り、16歳で出家する。比叡山ほか各地で修行したのち、法華経に真の教義を見い出した。2度の流罪の後、文永11年(1274)身延に籠り久遠寺を開いた。病気のため下山して武蔵国池上の地で入没。
	にっしょう 日昭 1221～1323 鎌倉時代	日蓮宗の僧。日蓮の本弟子で六老僧の一人。日蓮より1歳年長で、比叡山の学友であったが、建長5年(1253)に日蓮の門下になる。日朗の叔父にあたる。池上宗仲とは親戚関係にある。日昭門流・浜門流の祖。
	にちろう 日朗 1245～1320 鎌倉時代	日蓮宗の僧。日蓮の本弟子で六老僧の一人。早くから日蓮のそばについて仕えた。弘安5年(1282)、池上宗仲の協力のもと、池上本門寺の基礎を築いた。鎌倉妙本寺、武蔵池上本門寺の主。日朗門流・池上門流・比企谷門流の祖。
	にっこう・にちこう 日興 1246～1333 鎌倉時代	日蓮宗の僧。日蓮の本弟子で六老僧の一人。弘安5年(1282)9月8日、常陸国への湯治を目指して身延を発った日蓮に随行。日蓮入滅後、富士上野に大石寺を開き、後に本陣を北山本門寺に移す。日蓮宗富士派・日興門流・興門派の祖。
	にこう 日向 1253～1314 鎌倉時代	日蓮宗の僧。日蓮の本弟子で六老僧の一人。13歳で入門し主家得度してから常にそばに仕える。日蓮宗総本山身延山久遠寺第二世。茂原市の妙光寺(後の藻原寺)及び戸田市の妙顕寺を開く。身延門流・日向門流・藻原門流の祖。
	にっちょう 日頂 1252～1317 鎌倉時代	日蓮宗の僧。日蓮の本弟子で六老僧の一人。日蓮の有力な檀越である富木常忍(日常)の養子となり、幼くして日蓮に師事した。日蓮の佐渡配流の際に従って奉仕。晩年は養父常忍と対立し、故郷駿河国の日興のもとに赴き、重須本門寺の学頭となった。

表1-4-1 大田区の歴史的風致と関わりのある主な人物（続き）

肖像・関連施設	名前	概要
	にちじ 日持 1250～不詳 鎌倉時代	日蓮宗の僧。日蓮の本弟子で六老僧の一人。初め駿河国蒲原の天台宗寺院四十九院で日興に師事し天台教学を学んだが、日興とともに追放され、日蓮に師事。日蓮入滅後は日興と不和となり、日淨とともに願主となり池上本門寺に祖師像を安置。
	いけがみむねなか 池上宗仲 不詳～不詳 鎌倉時代	日蓮の有力な檀越。官位は右衛門大夫。弘安5年(1282)9月18日、日蓮は、湯治のため常陸国へ旅する途中、武藏国池上郷の彼の居館に滞在し、同年10月13日に同居館で入滅した。日蓮入滅後、館や土地を寺に寄進し、池上本門寺の基礎となる。
	いけがみやすみつ 池上康光 不詳～不詳 鎌倉時代	池上宗仲の父。鎌倉幕府の作事奉行として、武藏国池上の千束の郷を賜っている。官位は左衛門大夫。真言律宗の忍性の熱心な信者であったため、日蓮の信徒となった宗仲を、健治2年(1276)、同3年(1277)の二度にわたり勘当している。
	ふじわらのただかた 藤原忠方 不詳～不詳 平安時代	平安時代前期の貴族。藤原北家、右大臣・藤原良相の子。天慶3年(940)に発生した平将門の乱鎮圧のため、武藏国千束池に赴き、地名に因んで池上姓を名乗ったとされる説がある。
	みなもとのよしいえ 源義家 1039～1106 平安時代	平安時代中期から後期の武将。鎌倉幕府を開いた源頼朝や室町幕府を開いた足利尊氏の祖先に当たる。11世紀前半の後三年の役(平安時代後期の陸奥・出羽(東北地方)を舞台とした戦役)で、奥州に向かう源義家が洗足池ほとりの千束八幡宮で戦勝祈願した。
	ほうじょうまさこ 北条政子 1157～1225 平安時代	平安時代末期から鎌倉時代初期の政治家。鎌倉幕府初代将軍源頼朝の正妻である。多摩川浅間神社は、北条政子が信仰する富士浅間神社に対して、夫である源頼朝の武運長久を祈るために、持仏の観音像を祀ったのがはじまりである。
	かつかいしゅう 勝海舟 1823～1899 江戸時代～明治期	江戸幕府陸軍最後の陸軍総裁。戊辰戦争時には幕府軍軍事総裁となり、徹底抗戦の主張に対し、早期停戦と江戸城無血開城を主張し実現。江戸城明け渡しの話し合いに向かう際に休憩した洗足池付近の風景を気に入り、別荘「洗足軒」を大森に設ける。

表 1-4-1 大田区の歴史的風致と関わりのある主な人物（続き）

肖像・関連施設	名前	概要
	さいごうたかもり 西郷隆盛 1828～1877 江戸時代～明治期	薩摩国薩摩藩の下級武士の出である。 慶応4年(1868)、西郷隆盛と勝海舟は池上本門寺で会談し「江戸城の無血開城」を実現した。洗足池の畔にある「西郷隆盛の留魂祠」は、勝海舟が西郷隆盛の菩提を弔うために建立したもの。

1-5. 文化財等の分布状況

要確認（図（写真）掲載の可否）

（1）文化財の指定等の状況（令和6年（2024）11月時点）

区内には、縄文、弥生、古墳時代を通じて形作られた特徴的な遺跡が多数残り、当時の生活の様子をうかがい知ることができる。大田区では、こうした遺跡や出土品をはじめ、建造物、民俗文化財などを数多く指定している。

区内に所在する国の指定文化財は、重要文化財4件、重要有形民俗文化財1件、史跡2件の計7件である。また、国の登録有形文化財（建造物）は31件所在している。

東京都の指定文化財は、有形文化財16件、無形民俗文化財3件、史跡4件、旧跡4件、名勝1件、天然記念物1件の計29件所在している。

大田区の指定文化財は、有形文化財82件、有形民俗文化財14件、無形民俗文化財2件、史跡18件、天然記念物2件の計118件所在している。

表1-5-1 大田区における指定文化財などの件数（R6.11.19時点） (件)

種類	国		都	区
	指定 ^{※1}	登録	指定	指定
有形文化財	建造物	2	31	1
	絵画			4
	彫刻	1		29
	工芸品			3
	書跡・典籍			2
	古文書	1		7
	金石文 ^{※2}			27
	考古資料			
	歴史資料			1
無形文化財	芸能	(1)		
	工芸技術	(1)		
民俗文化財	有形の民俗文化財	1		14
	無形の民俗文化財			2
記念物	遺跡 ^{※3}	2	4	18
	旧跡 ^{※4}		4	
	名勝地 ^{※5}		1	
	動物・植物・地質鉱物 ^{※6}		1	2
合 計		7	31	29
				118

※1：国指定文化財は、個人所有を除く。（ ）内が個人所有（管理）。

※2：「金石文」は、大田区独自の分類。

※3：「遺跡」に関して、国指定文化財は「史跡」という。また、都と区も、それぞれの指定文化財を「史跡」と表現している。

※4：「旧跡」は、東京都独自の分類。

※5：「名勝地」に関して、都は、都指定文化財を「名勝」と表現している。

※6：「動物・植物・地質鉱物」に関して、都と区は、それぞれの指定文化財を「天然記念物」と表現している。

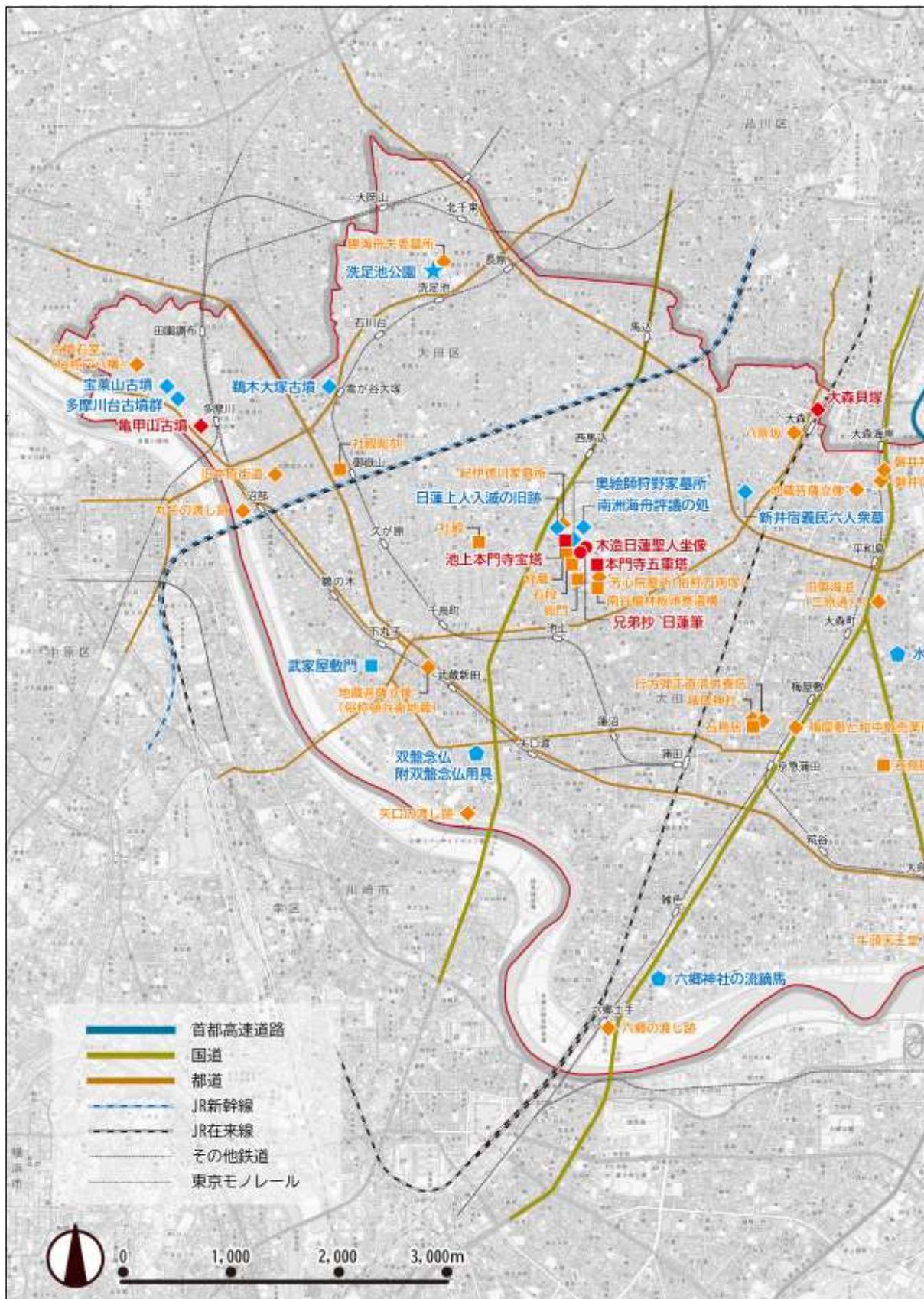
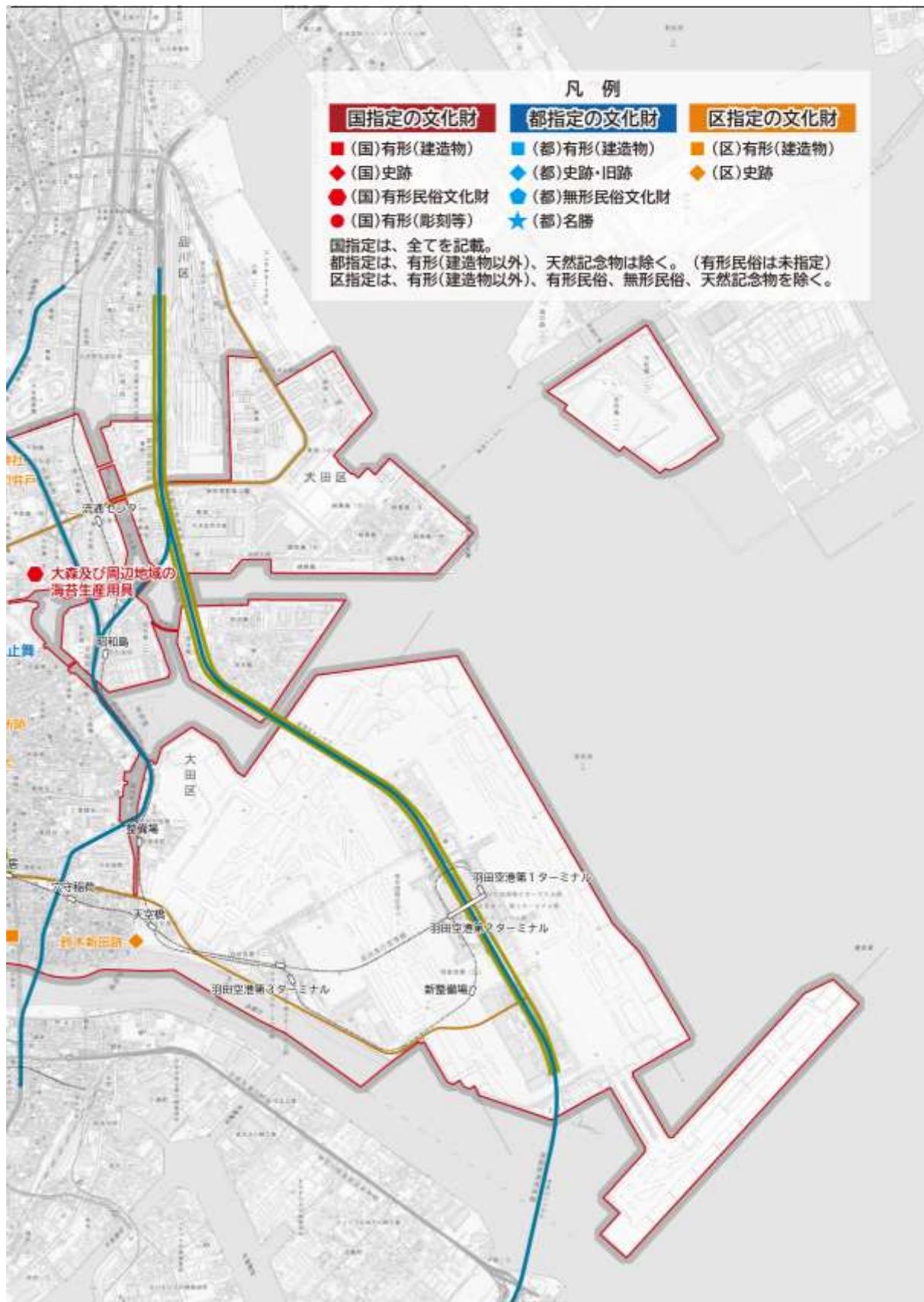


図 1-5-1 指定文化財の分布（国、東京都、大田区が指定する建造物、有形民俗文化財、無形民俗文化財、史跡、名勝等を掲載）



(2)国の指定等文化財

国の指定等文化財は、重要文化財4件(うち建造物2件、彫刻1件、古文書1件)、重要有形民俗文化財1件、史跡1件の合計7件及び登録有形文化財31件が所在する。

これらのうち、主な文化財を以下に示す。

①重要文化財

ア. 本門寺五重塔 (建築年: 慶長12年(1607))

本門寺五重塔は、三間五重塔婆、初層・二層は本瓦葺、三層・四層・五層は瓦棒銅板葺(当初本瓦葺)、高さ31メートルの建物である。

2代将軍徳川秀忠公の武運長久・病氣平癒を当山に祈願した秀忠公の乳母岡部局が願主となり、秀忠公が建立・寄進した建物。当初、大堂の右手前、現在の鐘楼堂と対の位置に建てられたが、元禄15年(1701)から翌年にかけての大修理の際に現在地へ移築された。



図1-5-2 本門寺五重塔

イ. 池上本門寺宝塔 (建築年: 文政11年(1828))

宝塔は、上下層とも円形の平面をもつ木造の仏塔で、屋根は宝形造、銅板葺で、その上に露盤と相輪を載せる。宗祖の550回遠忌に際し、信徒の本願により文政11年(1828)に上棟した。

内外とも彫刻や彩色によって荘厳化が図られ、意匠的に高い価値が認められる。内部空間を持つ木造の宝塔は全国的にも類例が少なく、池上本門寺宝塔はそのうち最大規模の遺構である。



図1-5-3 池上本門寺宝塔

②重要有形民俗文化財

ア. 大森及び周辺地域の海苔生産用具

東京湾奥部の大森・品川地区で使用されてきた海苔養殖及び乾海苔製造用具一式である。

海苔生産の技術は、海上でのヒビを用いた養殖技術と、採取した海苔を陸上で乾海苔にする製造加工技術の2つに大別される。平成5年指定の資料は、養殖用具、採取用具、加工用具、海苔船および船用具、海苔ヒビ等製作用具、



図1-5-4 大森及び周辺地域の海苔生産用具

漁場慣用具、仕事着、飲食・灯火用具、その他に分類される。

③史跡

ア. 大森貝塚（築造年代：縄文時代後期（約4000年～2300年前））

京浜線大森駅より大井町駅に至る線路に面する地域にあり、縄文式文化の後期に属する貝塚で、土器・石器・土版・骨角器等が多量に出土している。

明治10年（1935）アメリカの磧学エドワード・シルヴェスター・モールス来朝の際、車窓より発見し、同年10月わが国における最初の学術的な発掘を行い、同12年英文及び邦文によって発表された。



図1-5-5 大森貝塚（塚）

イ. 亀甲山古墳（築造年代：古墳時代（4世紀後半））

多摩川左岸の台地上に立地する多摩川流域最大の前方後円墳。全長約107メートル、後円部径約66メートル・高さ約11メートル、前方部幅約49メートル・高さ約7メートル、2段築成で葺石・埴輪は確認されていない。内部構造は未調査のため不明。



図1-5-6 亀甲山古墳

④登録有形文化財

ア. 萬屋酒店（建築年：明治8年（1875））

池上本門寺参道沿いの現在地に茶屋を営んだのが当家のはじめると伝える。つし二階建、出桁造りの江戸時代以来の町家の形式で、上げ下げ戸を含めて古い形態を残す。門前町の代表的な建物のひとつであり、ランドマークとなっている。



図1-5-7 萬屋酒店

イ. 吉川家住宅主屋（建築年：大正13年（1924））

沿革不詳だが映画関係者が撮影用に建設したと伝えられ、建設後まもなく転売された。平屋建、下見板張の洋館で、居間を中心とする平面計画と装飾的要素の少ないデザインが特色である。一部に増築等の改変はあるが、内外装、建具等に当初の姿を残す。



図1-5-8 吉川家住宅主屋

(3) 東京都の指定文化財

東京都の指定文化財は、有形文化財 44 件(建造物 1 件、絵画 1 件、彫刻 4 件、書跡・典籍 1 件、古文書 9 件)、無形民俗文化財 3 件、史跡 4 件、旧跡 4 件、名勝 1 件、天然記念物 1 件の合計 29 件が所在する。これらのうち、主な文化財を以下に示す。

① 有形文化財

ア. 武家屋敷門 (建築年代: 江戸時代末期(19世紀中頃))

構造は一重、入母屋造、浅瓦葺、片番所出格子附、片潜門。桁行八間柱真々 48 尺 6 寸 2 分(14.73 メートル)、梁間三間柱真々 17 尺 2 寸 4 分(5.22 メートル)。

小大名格の武家屋敷門としては格調正しい様式を備えており、構造・形式ともによく保存されている。江戸時代末期の建築と推定され、現在地に移築されてからは、寺の山門として使用されている。



図 1-5-9 武家屋敷門

② 無形民俗文化財

ア. 水止舞

約 700 年の歴史を持つ雨を止める祈りの伝統芸能。厳正寺で開催される。わらで編んだ縄を渦巻き状に巻きあげた雄雌 2 匹の龍神の中に大貝を吹く人が入り、水をかけられることで、龍神を喜ばせて雨を降らせる。厳正寺境内の舞台に到着すると、今度は、赤面の雄獅子と黒面の若獅子と金面の雄獅子の 3 匹の獅子が、奉納笛や唄に合わせて舞を披露することで龍神を鎮めて雨を止める。



図 1-5-10 水止舞

イ. 六郷神社の流鏑馬

六郷神社の流鏑馬は、一般的な馬を駆けながら行うものではなく、的の手前まで歩いてから弓を射る「歩射(転じて「オビシャ」とも)」と呼ばれる形式の正月行事。

6 尺(約 1.8 メートル)四方の垂れ幕の中心に、内・上・外・下を見つめる 4 対の鬼の目玉「八方白眼」が貼られ、ここに矢を放つことで、その年の恵方を寿ぐとともに邪氣退散の願いを込める。



図 1-5-11 六郷神社の流鏑馬

③史跡

ア. 多摩川台古墳群（建造年代：古墳時代末期（6世紀前半～7世紀中頃））

多摩川下流域左岸の台地上に分布する古墳時代後期の古墳群。6世紀前半に円墳の2号墳、その後2号墳を前方部に利用した1号墳（全長39メートルの前方後円墳）、以降3～8号墳（直径15メートル前後の円墳）が7世紀中頃まで継続して築造された。調査が行われた古墳の石室からは装身具や武器・武具、馬具、土師器、須恵器などが出土、墳丘からは埴輪が発見されている。



図1-5-12 多摩川台古墳群

④旧跡

ア. 日蓮上人入滅の旧跡

日蓮は晩年身延山に隠棲し、弟子や信者の指導に当たっていたが、弘安5年（1282）9月8日、病氣療養のため身延山を離れ、武藏国荏原郡千束郷池上村の地頭、池上右衛門太夫宗仲の館邸（現本行寺）に到着し、10月13日にこの場所で入滅したと伝えられている。



図1-5-13 日蓮上人入滅の旧跡（現・本行寺）

⑤名勝

ア. 洗足池公園

武藏野台地の湧き水をせき止めた洗足池を中心とした公園。洗足池は、かつて「千束郷の大池」と呼ばれ、灌漑用水としても利用されていた。日蓮が病氣療養のため身延山から常陸国に向かう途中に立ち寄った際、池で足を洗ったことが「洗足池」の名の由来と言われている。広さ約39,000平方メートルの洗足池を中心に、桜を代表とする四季折々の自然をはじめ、史跡、人事等の歴史的資源が豊かな、開園面積約78,000平方メートルの総合公園である。



図1-5-14 洗足池公園

(4) 大田区の指定文化財

区指定文化財は、有形文化財 82 件(建造物 9 件、絵画 4 件、彫刻 29 件、工芸品 3 件、書跡・典籍 2 件、古文書 7 件、金石文 27 件、歴史資料 1 件)、有形民俗文化財 14 件、無形民俗文化財 2 件、史跡 18 件、天然記念物 2 件の合計 118 件が所在する。これらのうち、主な文化財を以下に示す。

① 有形文化財

ア. 総門 (建築年代: 元禄年間(1688-1704))

高さ 6.4 メートル、主柱間 5.39 メートル、総檜素木造りの壮大な構えの池上本門寺総門。元禄年間(1688-1704)に建てられた。広重の浮世絵(江戸百景)などにも描かれている。

扁額の文字は、本阿弥光悦(元禄元年(1558)~寛永 14 年(1637))の書を彫刻したものである。額は複製され、実物は寺宝として寺内に保管されている。



図 1-5-15 総門

イ. 牛頭天王堂 (建築年: 文久元年(1861))

自性院(本覚寺)にある牛頭天王堂は、入母屋造り、銅板葺。向拝に軒唐破風を付け、その下に弁財天の彫刻が施され、各軒廻りに斗栱を持つ。区内では、数少ない江戸末期の精巧な社殿彫刻で、昭和 4 年(1929)に大森弁天社より移築されたものである。



図 1-5-16 牛頭天王堂

② 有形民俗文化財

ア. 庚申供養塔(田園調布南の密蔵院) (建築年: 寛文元年(1661))

田園調布南の密蔵院にある庚申供養塔は、寛文元年(1661)に造立された大田区最古のもの。舟型の石に地蔵菩薩立像を半肉彫りした、江戸初期の典型的な様式を示している。

当時の沼部村村民の有志 8 名が造立したものである。

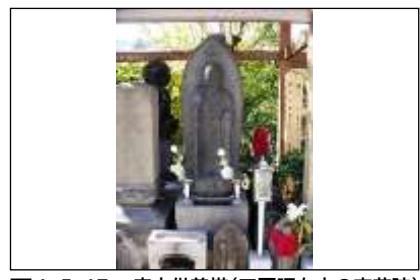


図 1-5-17 庚申供養塔(田園調布南の密蔵院)

③無形民俗文化財

ア.六郷神社獅子舞

六郷神社の例大祭で行われる数百年の伝統を有した獅子舞は、太平洋戦争後一時途絶えたが、昭和23年(1948)に復活した。獅子の威勢が悪疫、災禍を払い、平安と幸福をもたらす信仰に支えられてきた郷土芸能である。

六郷神社の獅子舞は、昔から神事舞(祭り儀式の一種として行なわれる舞)としての伝統を守っているため、演舞は祭りの日に限られている。



図1-5-18 六郷神社の獅子舞

④史跡

ア.勝海舟夫妻墓所

勝海舟は、官軍が置かれた池上本門寺に赴く途中、洗足池で休息をとり、周辺の風景が気に入ったと伝えられる。明治24年(1891)、その縁で、海舟は洗足池のほとりに別荘「洗足軒」を構えた。

その後、海舟は遺言で、屋敷裏の台地に葬られたと伝えられ、妻である民子は青山墓地に葬られたが、後年ここに合葬された。



図1-5-19 勝海舟夫妻墓所

(5)特產品、工芸品、菓子・料理等

①特產品

区内には、農業、水産業に関わる特產品がある。代表的なものを以下に示す。

表 1-5-2 特產品

写真	名称	特徴
	まごめはんじろふしなりきゅううり 馬込半白節成胡瓜	明治 33 年(1900)頃、馬込村で白い部分の多い、独特の性質をもった馬込半白がつくられた。大正 9 年(1920)頃、篤農家数件でつくられ、その後、昭和 8 年(1933)には、『馬込半白採種組合』が設立されて品種の保存と均一化に努めた。栽培されたのは昭和 38 年(1963)頃までであるが、現在も大森地区では数戸の農家が栽培している。
	まごめおおぶとさんすんにんじん 馬込大太三寸人参	西馬込の篤農家により、砂村三寸と川崎三寸を交配し、各々の長所を受け継いだ、大形で形・色のよい人参が改良され固定された。昭和 25 年(1950)、大森東部農協が『馬込大太三寸人参』の名称で農林省に種苗登録し以後、馬込の特產品となった。栽培されたのは昭和 38 年(1963)頃までであるが、現在も大森地区では数戸の農家が栽培している。
	馬込のシクラメン	戦後、大森東部農業協同組合(現 JA 東京中央馬込支店)の青年部有志が「馬込園芸研究会」を立ち上げ、昭和 27 年(1952 年)に試験的に作り始めたのが実質的な始まりである。現在でも 2 軒の生産農家があり、11 月から年末になると、温室は出荷・販売される色とりどりのシクラメンであふれかえる。
	大森海苔	海苔養殖は、享保(1716-1736)の頃、大森から品川の沿岸部で始まり、延享 3 年(1746)、將軍家に献上する海苔の産地としての発展が成長のきっかけである。その後、東京都の沿岸部埋立計画に応じ漁業権を放棄したことで、昭和 38 年(1963)に海苔養殖の歴史は幕を閉じた。しかし、現在多くの海苔関連業者が海苔の流通拠点として営業している。

②工芸品

区内の工芸品に関する代表的なものを以下に示す。

表 1-5-3 工芸品

写真	名称	特徴
	江戸表具	表具の歴史は奈良時代に始まるが、江戸表具は17世紀初頭、江戸に幕府が開かれたことにより、大名や寺社とともに抱えの表具師が江戸に居を構えたのが始まりである。江戸の武家文化から発展してきた江戸表具は、控えめで軽妙な意匠の中にも豪華さや華やかさをあわせ持つのが特徴である。

③菓子・料理等

区内の菓子・調理などの代表的なものを以下に示す。

表 1-5-4 菓子・調理など

写真	名称	特徴
	くず餅 久寿餅	くず餅は、葛粉に砂糖と水加えて加熱しながら練り上げて、型に流して固めた菓子を想像するが、これは主に関西圏の「葛餅」である。関東圏では、小麦粉からグルテンを分離させた浮粉(でんぶん)を乳酸菌で発酵させて作った「久寿餅」が一般的である。池上本門寺門前で、数店の和菓子屋や甘味処等が通年で製造・販売している。
	羽根つき餃子	今では、全国の中華料理店や大手冷凍食品メーカーからも販売されている「羽根つき餃子」は、蒲田が発祥であると言われている。蒲田にある中華料理店の創業者が、中国・大連の焼饅頭をヒントに作った羽根つき餃子が人気となり、現在、蒲田には羽根つき餃子を提供する店舗が多くみられるようになった。